

千葉大学医学部附属病院における 過去5年間のクラシエ漢方エキス製剤処方状況

千葉大学医学部附属病院 和漢診療科(千葉県)

龍 興一、大橋 範之、八木 明男、島田 博文、平崎 能郎、並木 隆雄

西洋医学が主流となっている現代の医療においても、漢方薬は西洋医にとって治療の選択肢の一つとして位置づけられている。そこで、過去5年間の当院においての他科を含めた処方状況を調査した結果に基づき、漢方薬の使用実態について考察し、さらに過去3年間の紹介患者で印象の強かった2症例を供覧する。

Keywords 漢方薬の使用実態、クラシエ漢方製剤、八味丸M

緒言

明治期以降、本邦において漢方医学は医学の本流から外され、大多数の医師からは一種の代替医療あるいは民間療法の類と認識されていた。しかし近年、医学部の教育課程に漢方医学が採用されたことなどで漢方薬に理解のある西洋医が増加している。その証左の一つとして、当院における当科への紹介件数が挙げられる。過去3年間、他科から当科への紹介件数は100件前後で推移している。その中で印象の強かった2例を紹介する。

症例1

52歳 男性 脳神経内科より紹介

【現病歴】 X-10年頃からめまいを自覚していた。X-2年に意識消失あり転倒。

その後精査の一環として当院脳神経内科を受診し回転性めまいと診断され、ジフェンヒドรามミンサリチル酸塩・ジプロフィリン配合剤を内服しやや改善した。しかしながら大きな効果は得られず、めまいの頻度は依然として多かったため、漢方治療目的にX年2月当科紹介となった。

【漢方医学的所見】

脈：浮沈中間 やや虚 やや洪

舌：紅舌 白黄苔 齒痕 舌裏静脈怒張軽度

腹：腹力3- 両側腹直筋攣急 小腹不仁 振水音

【経過(図1)】 齒痕・振水音から水滯と考へクラシエ五苓散料エキス細粒6g(分2)を開始。頓用でなくあえて分服で併用することによりジフェンヒドรามミンサリチル酸塩・ジプロフィリン配合剤の有効性が上がり、めまいの頻度自体も

減少した。途中耳鳴が出現しウチダの八味丸M40丸(分2)を併用することで改善せしめた。以前は台風の時などはかなり辛かったとのことであったが漢方治療開始してからは大過なく経過した。

症例2

67歳 男性 消化器内科より紹介

【現病歴】 X-1年、黄疸・肝機能障害にて近医受診。検査の結果膀胱癌及び肝転移・骨転移と診断され当院消化器内科紹介受診。当院にて集学的治療施行されていた。元々腰痛を患っていたが、度重なる入院安静により増悪したため腰痛に対する漢方治療目的にX年6月当科紹介受診となった。

【漢方医学的所見】

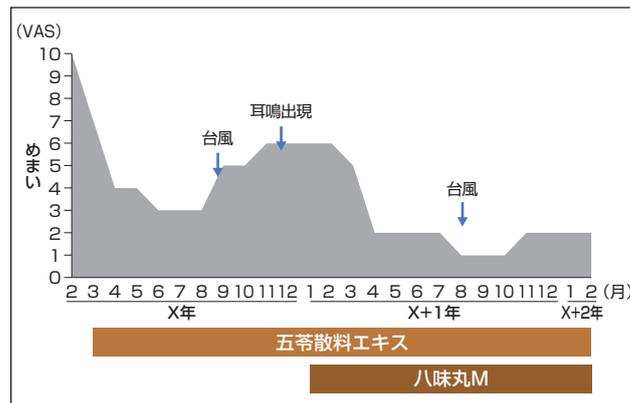
脈：やや浮 やや実 弦 不洪不滑

舌：紅舌 齒痕軽度 黄白苔 舌裏静脈怒張軽度

腹：腹力4 腹直筋攣急 心下痞硬 胸脇苦満 鼓音

小腹不仁

図1 症例1 経過



【経過(図2)】 所見は陽実証のようであるが、原疾患が進行癌であることから実際には陰病期と考えた。小腹不仁と毎晩3回の夜間尿から腎虚と考え、腎虚を目標にウチダの八味丸M60丸(分3)を開始した。その後腰痛と嘔気を主訴に当院消化器内科入院。入院に伴い一時休薬していたが、本人は改善を自覚されていたようで漢方継続の意志あり、退院後全身状態の改善目的にクラシエ十全大補湯エキス細粒7.5g(分2)に転方した。その後クラシエ六君子湯エキス細粒6g(分2)を併用し消化器内科外来で腹水穿刺を繰り返しつつも小康状態を保ち11月に予定していた家族の慶事に独歩で参加できた。X年12月、永眠された。

症例2においては原疾患の進行に伴いマスクされた可能性は否めないが、2症例ともに明らかに漢方によると推測される有害事象はみられなかった。

近年の西洋医の漢方に対する高い理解を示すもう一つの証左として、処方件数が挙げられる。当院における他科のクラシエ漢方エキス製剤の処方件数の合計は2017年度に約960件であったが2021年度には約1,760件と約1.8倍以上に増加しており、5年間の累計では6,511件と、当科の5,352件を上回る(図3)。

本稿の目的は過去5年間の当院における診療科別の処方件数やその処方内容を明らかにし、他科における漢方薬処方傾向の把握を試みるものである。

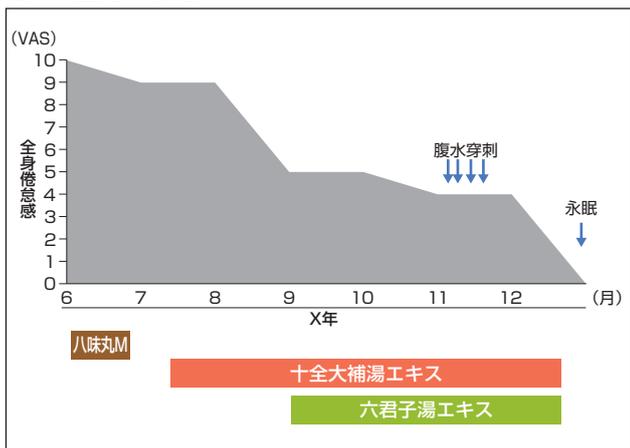
手 法

千葉大学医学部附属病院にて、2017年4月から2021年3月までの60ヵ月間および12ヵ月ごとの全科でのウチダの八味丸Mを含むクラシエ漢方エキス製剤の処方件数を診療科別・方剤別に抽出した。

結 果

診療科別の処方件数では当科に次いで小児科が最も多

図2 症例2 経過



く、脳神経外科、消化器外科、精神科、麻酔科、小児外科と続いた(図3、4)。

方剤別に処方件数を見ると五苓散料が最も多く、次いで僅差で六君子湯、以下八味丸M、補中益気湯、葛根湯、十全大補湯と続いた。しかしながら処方数の実数を見ると八味丸Mが最も多く、次いで五苓散料、補中益気湯、六君子湯の順であった(図5：次頁参照)。

五苓散料の処方件数は当科と脳神経外科がほぼ同数で、小児科・精神科・麻酔科が続いた。六君子湯は小児科の処方が全体の4割近くを占め、消化器外科・小児外科・救急科と続いた(図6：次頁参照)。八味丸Mの処方件数は9割以上が当科によるものであった。

当科処方の内訳は八味丸Mが約3割で最も多く、補中益気湯・五苓散料が続いた(図7：次頁参照)。

小児科での処方は約8割が六君子湯で五苓散料、補中益気湯と続いた。

脳神経外科での処方は五苓散料が8割近くを占め当帰四逆加呉茱萸生姜湯、防風通聖散料と続いた。

図3 千葉大学医学部附属病院における過去5年間のクラシエ漢方エキス製剤の診療科別処方件数

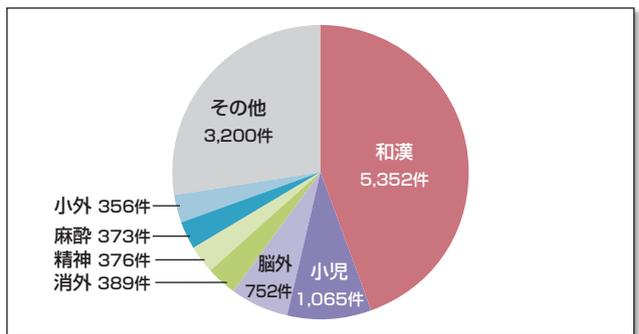
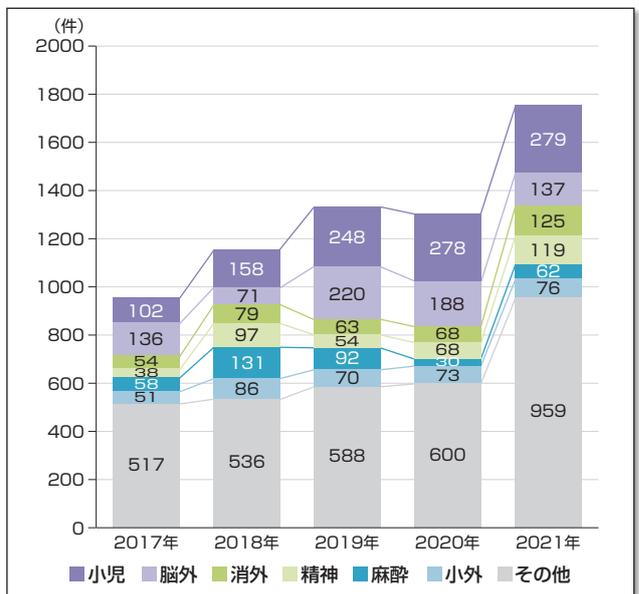


図4 各年度ごとにおける和漢診療科以外の診療科別処方件数の推移



消化器外科では六君子湯が約8割を占め、補中益気湯、五苓散料が続いた。

コロナ禍にある2020年・2021年度とコロナ禍前の2018年・2019年とを比較すると33診療科中22診療科で処方件数は増加しており、特に救急科・歯科で5倍以上の増加を示していた。

図5 過去5年間の処方件数と処方実数

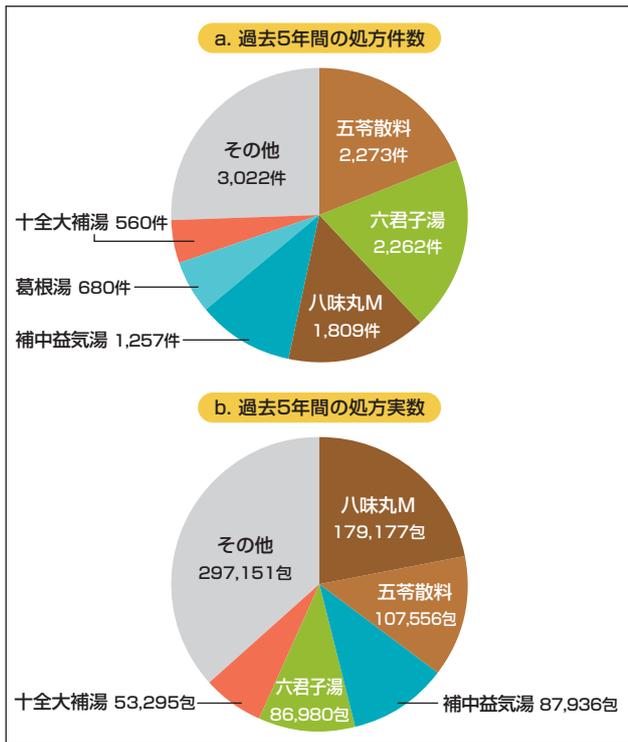
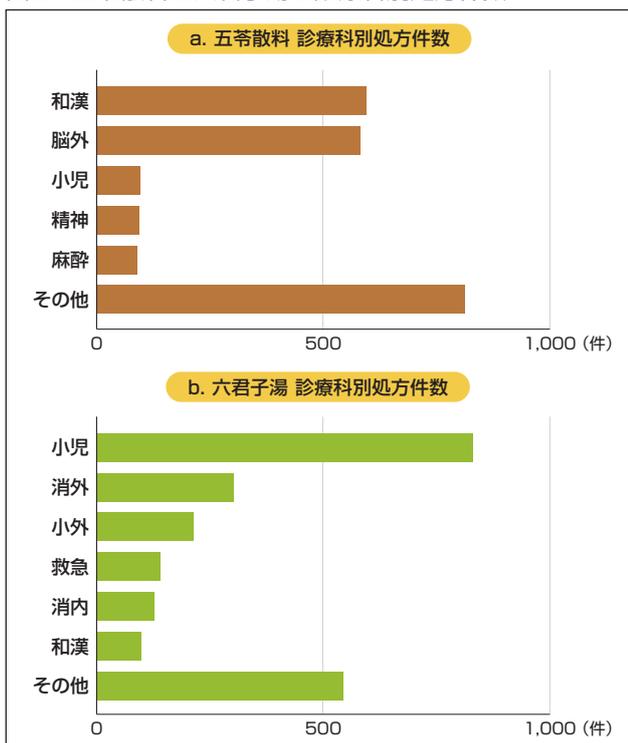


図6 五苓散料と六君子湯の診療科別処方件数



考察

処方件数について、当科を除いて処方の多い3科はいずれも特定の方剤が約8割を占めており、一種の方剤(五苓散料ないし六君子湯)が好んで使用される傾向にあった。

処方件数もそれを反映して五苓散料と六君子湯が上位を占めている(図5)。

しかしながら実数で比較すると順位が入り替わり八味丸Mが最も多く、六君子湯に至っては補中益気湯よりも少ないという結果であった。前者の要因としては八味丸Mは分服で長期間使用されるのに対し五苓散料は頓用での使用及び短期での処方が好まれていることが挙げられる。後者については、六君子湯を最も処方している小児科の処方の大部分が0.2~0.3g/kg/dayの体重換算処方であるため件数と実数の差が少ないことが挙げられる。八味丸Mは当科以外での処方件数が極端に少なく、また処方している診療科も32診療科中6科に留まっていた。

コロナ禍前後で救急科の処方数が約6倍と急激に伸びている。内訳は2/3が六君子湯で1/3が五苓散料である。六君子湯は救急では胃管逆流防止目的にセットオーダーが組まれており、集中治療の場でも漢方治療の有効性は示せていると考えている。

同様に約5倍に伸びた歯科顎口腔外科では口腔内乾燥症をのどの渇きと捉えて五苓散料、神経痛に麻杏薏甘湯が好んで使用されていた。実際、当科の次に麻杏薏甘湯を多く処方しているのは歯科顎口腔外科であった。

結語

医学の発達した近年においてなお、漢方薬は西洋医にとっても選択肢の一つとなり得る。だからこそ、用法用量についても現代のライフスタイルにより適応した選択の幅を広げることでより漢方薬の汎用性の向上が見込めると考える。

図7 過去5年間の和漢診療科における処方件数

